

キャベツ菌核病（病原菌：*Sclerotinia sclerotiorum* (Libert) de Bary）

○ 被害と発生生態

糸状菌による病害で、結球期以降に発生する。はじめに外葉の基部や地面に接する部分に淡褐色水浸状の病斑を形成する。病斑は次第に拡大してへこみ、軟化、腐敗し、葉はしおれる。病勢が進むと結球部全体が汚灰白色に腐敗する。腐敗部には白色綿状の菌糸が密生し、表面に黒いねずみの糞に似た菌核ができる。軟腐病のような悪臭はしない。

発病株に形成された菌核は被害作物残渣とともに土壤に混入して、伝染源になる。菌核は土中では4～6年間は生存でき、次年度以降の伝染源になる。3～5月と9～11月頃の2回（適温 15～20℃）、子のう盤と呼ばれる黄褐色の浅い杯状のキノコを地表に生じ、その頂部に子のう胞子を形成する。子のう胞子は雨滴や風によって飛散し、植物体に到達する。子のう胞子は茎葉上で発芽し、感染して病斑を形成する。病株や残渣中の菌糸が、葉に接触して病気を起こすこともある。

子のう盤が形成される時期に降雨が続くと、本病の発生が多くなる。

本病はレタス、キュウリなど非常に多くの種類の野菜に発生するが、キャベツは特に被害が多い。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・伝染源は前作の被害植物にできた菌核なので、菌核をほ場に残さないようにほ場衛生につとめる。
- ・深く耕して、菌核を地表から5 cm以上の深さに埋め込む。
- ・菌核を死滅させるため、夏期に約1か月間の湛水をする。
- ・連作をせず、イネ科作物との輪作を行う。
- ・マルチ被覆により、子のう胞子の飛散を防ぐ。
- ・発病株は菌核を形成しないうちに抜取り処分する。

(イ) 薬剤防除

- ・結球開始期から予防的に薬剤散布をする。



結球期の病徴



被害末期の病徴